

ブルクハルトとギリシア史

仲手川 良雄

【要約】ブルクハルトの遺稿『ギリシア文化史』は、それが公刊された直後、当時の指導的古代学者たちのきびしい批判に晒された。その後この書に対する見方は改まり、しだいに高く評価されるようになったが、今日のギリシア研究とこの書との関係は、客観的にはまだほとんど究明されていない。本稿は第一に、「アゴーン」や「ポリス」をはじめとして、ブルクハルトの創見にかかるギリシア史上の諸問題が以後の研究にどのように受けとられたかを、なるべく客観的に追跡し、第二に、『ギリシア文化史』がおもにドイツの古代研究の流れの中で、どのような位置を占めているかを見定め、第三に、『ギリシア文化史』に対する評価の変遷を辿り、はじめ優勢であった批判的傾向が一九三〇年ごろを境として肯定的評価に場所を譲った事情、またこの転換をもたらした背景の諸事情を観察し、第四に、『ギリシア文化史』の今日的意義として、それがわれわれのギリシア研究に何を与えるかを論じたものである。

史林 七〇巻三号 一九八七年五月

ブルクハルトの『ギリシア文化史』ははじめの二巻が一八九八年に、つぎの二巻が一九〇〇年と一九〇二年にそれぞれ出版されたが、講義録に手を入れたこの遺稿がその後辿った運命は、かれの壮年期の著作『イタリアにおけるルネサンスの文化』に比べると、対照的ともみえる。

『ルネサンスの文化』以後のルネサンス研究は、ブルクハルトの考察を継承するよりも批判することに専念しているとみえるが、しかし少なくともそれを無視することはできない。むしろこの著作の圧倒的な影をなんとか振りはらおうと努

めながら、振り切れずに模索しているようにみえるかぎりで、『ルネサンスの文化』は以後のルネサンス研究の原点であるといつてよからう。これにひきかえ、『ギリシア文化史』はユニークな考察とはみられたが、正統なギリシア研究によって拒絶され、学問的研究からは視野の外におかれてきたかのような印象をもたれている。

たしかにこの大部の書物は一部では高く評価され、ことにブルクハルト研究者たちによって解釈され、パラフレーズされてきたことはいうまでもない。しかしいっそう客観的立場から、以後の学問的研究のなかで、この書における個々の問題のどれが、どのように受取られてきたか、またこの書は古代研究のなかでどのような位置を占め、全体としてどのように評価されてきたか、さらに今日のギリシア研究にとってこの書はどのような意義をもち、何をあたえうるかについて、全般的に考察したものは見当らないといつてよからう。⑧

もっともこれらを充分におこなうためには、『ギリシア文化史』以後のギリシア研究についての十分な知識が前提されるが、筆者にはたまたま目に入ったこと、多くの制約のなかでもかくできるかぎり調べたことを基にして、先の諸点についての不十分で暫定的な略図を描いてみることにしかできない。

『ギリシア文化史』に含まれる多くの洞察や主張のうち、学界においてもっとも広く、かつ異論なく受容されているのは、ギリシアの生、ことにギリシア文化の促進におけるアゴーンの働きである。④これについてのブルクハルトの把握はさほど単純ではなく、論者による解釈も一様ではないが、ともかく利害によらない、自発的で自由な競技が、ギリシアの生をほとんど全面において進展させたことは認められている。⑤アゴーンの原則にはじめて言及したのはC・ノイマンだが、以来V・エーレンベルク、⑦H・ベルヴェ、⑧H・シェーファー⑨など現代の古代史研究者にいたるまで、これについてのべている者は枚挙に遑ない。これを中心に扱った単行本は筆者の知るかぎりで三点、⑩他に多くの論文がある。「ブルクハルトが造った〈アゴーン的人間〉というこの言葉は、この間にたびたび乱用されてきているとはいえず、学問のなかに永住権を得た。」⑪というエーレンベルクの言はこの間の事情をいい当てていると思える。因みにインゴマル・ヴァイラーの調べ

たところによると、一九七三年現在でドイツ語圏のギュムナジウムや類似の教育機関で用いられている八種類の教科書にアゴンの記事があり、これはかれがいうように、ブルクハルトの洞察の成果が「幾世代をこえた精神的共有財産」^⑩になっている事情を示している。

ドイツ古典主義は古代ギリシアの生をかれらの生の形^{ビレトレング}成の規範として立てたが、その場合そのギリシア像は理想的な明るい色彩にいろどられていた。その典型的な表現はフリードリヒ・シラーの詩「ギリシアの神がみ」だとされている。^⑪このような樂觀^{オプティミスティク}的なギリシア観をシラー自身がどこまで本当にいっていたかには疑問がないわけではないし、ゲーテは明らかにその裏側にあるもう一つの現実のギリシアを見通していたが、^⑫ともかくこのようなギリシア観が古典主義、ロマン主義の時代を通して一般に受容されていたことは疑いない。

これをはじめに批判したのは、ベルリン大学でブルクハルトがその講筵に列したことがあるアウグスト・ベックで、「ギリシア人は、大方の人ががそう思いこんでいるよりも、もっと不幸であった。」^⑬というかれの言は、『ギリシア文化史』の中にも引用されている。この点におけるブルクハルトの業績は、このベックの指摘を徹底的に深めて、ギリシア人の生と歴史を捉えるかれのいわゆる「情念論的な視点」^{パトリオティスム}の、一つの基軸にしたことにある。『ギリシア文化史』のなかでも第五章「ギリシアの生の総決算のために」^⑭は格別ユニークで魅力ある叙述だが、ここでギリシア的ベシミズムはあますところなく描きだされている。しかもここだけではなく、ポリスの創設の際における人身御供、ポリスの生における市民たちの苦しみ、民主政末期における苦悩、またギリシアの人間の考察、さらには文化の基底にも、生の惨めさの視点が働いている。『オデュッセイア』のなかで、神がみは後世の人びとも歌があるように人間たちに破滅を定めた(VIII-577ff)といわれている言葉に対するブルクハルトの共感^⑮には、W・F・オットーの批判がある。しかしギリシア人の不幸については、『ギリシア文化史』に対するきびしい批判者であったE・マイヤーやK・J・ペロツホものべており、十九世紀末以後ではそれは多数意見になったとみていいのではないか。ブルクハルトは他の論者のようにそれを指摘するだけでなく、根

本的多面的に論述した点で、ギリシア観の転換者としての役割を果たしたといっても過言ではあるまい。しかしかれの捉えたギリシア人の不幸は、その対極に、この天才的民族がいだいた輝かしい生への強い渴仰があるのであり、それが現実の壁に突き当たったとき、傷つき、ベシズムがうまれるというもので、^④見方の単純な転換ではないということは、幾重にも強調されねばならない。

ギリシアの美術家は手工業者と同じように俗業者バナウツスとされ、社会的に低くみられたが、そのためにかえって時代の政治や思想の影響をうけることが少なく、末期まで高い芸術水準を維持したというブルクハルトの主張は影響力大きいもの一つだが、これについての論議およびこの主張の位置づけについては藤縄謙三教授の立ち入った論考がある。^⑤ほかに美術史の業績としては、新たに発見されたベルガモンの祭壇浮き彫りの価値を、H・ブルンやH・グリムなど当時の美術史家が低く見積ることしかできなかつたのに対して、ブルクハルトはいち早くそれが最盛期の巨匠の作品に匹敵する傑作であることを認めて後の評価を先取りしていること、^⑥またそれとも関連して、かれの古典主義概念などが注目される。

ブルクハルトが今日の史学に残した遺産として、アゴーン以上に重要性和問題性を含んでいるのは、かれのポリス把握である。ブルクハルトはギリシア語の *πόλις* を翻訳不可能として、それをそのままドイツ語に移した *Polis* という語を用いた。『ギリシア文化史』第二章「国家と国民」の叙述を通して「ポリス」はドイツの古代学に導入され、間もなくその重要な研究領域になった。以来、ポリスの構造把握については諸説が提出されているとしても、「ポリス」そのものはいわゆる「勝利の行進」をし、G・ブーゾルト、H・フランコット、J・ケールスト、M・ヴェーバーなどによって論究され、^⑦今世紀後半ではV・エーレンベルクのポリス観の基礎におかれたのである。

エーレンベルクはブルクハルトのポリス把握の主観性や学問的厳密さの不足を認めながらも、^⑧基本的にその把握を受容している。H・シェーファーはポリスを中心とするエーレンベルクの国家観に対して批判的見解を示すが、^⑨これに答えず、エーレンベルクはポリスを「ギリシア人の本来的で決定的な国家形式」とする見方を固持している。最近W・ガヴァ

ントカはギリシアの国家形式を「ポリス」とみる立場を批判的に論述した一書を著わして、ブルクハルト―エーレンベルクの説には収まりきれない諸説の存在を強調し、ことにその始点にあるブルクハルトのポリス概念の「非学問性」を批判しつつ、さまざまな不満を表明している。しかしそれはそれに代って、ギリシアの国家的現実を捉える新しい概念をみずから提示することも、他のそれを紹介することもできない。「ポリス」をめぐるのガヴァントカの長い論述は、古代以来ポリス概念に含まれる現実とユートピアとの混在を批判するD・ネルのエーレンベルク批判などに共感を示すのみで、かれみずからいうように、ギリシア国制史のなかで「ポリス」について語ることがなお意味かどうかという、「かろうじて問題提起のための挑発」^②に終っている。結局ブルクハルト―エーレンベルクの見解は国制史的なポリス把握のいわば「古典」学説で、それだけにそれに対する風当りは強いが、「ポリス」の語を不要にするような決定的な新説も現われていない、というのが実状とみてよいように思われる。

ブルクハルトのポリス観は一般に市民に対する国家主権の絶対性を強調しているとされ、R・シュターデルマンのように、これをきびしく批判する人もいる。^③この批判はブルクハルトとともに、近代ポリス観の源流とされるF・d・クーランジュには全面的にあてはまるであろうが、ブルクハルトに対しては必ずしも当てはまらない。クーランジュはポリスを閉鎖的祭祀共同体とみて、その絶対的支配権と排他性を強調する。かれによれば、ポリスに自由があったかのように考えるのは、人類のいだいたもつとも奇妙な誤謬である。^④これに対して、ブルクハルトは政治と宗教とをそれぞれ自立的なポテンツとして截然と分ける。ポリスは本来政治的共同体であり、宗教に作用されるが、それに究極的に支配されることはなく、むしろ時とともに、宗教の上に優越的な力を及ぼしてゆく。^⑤さらに重要なことは、ブルクハルトはポリスの絶対性を強調するが、同時にそこにおいてこそ個人が大きく伸びるといふ、もう一つの面をみている。そこで強化された個人の力とポリスの主権性とは結合し、あるいは抗争しながら、時とともに重心を個人の方に移してゆく。^⑥ブルクハルトの把握はこのようにはるかに複雑で、変化をも含んでいる。エーレンベルクは「ブルクハルトの叙述は深い認識と刺戟に充ちている。」^⑦と

いうが、エーレンベルクがおもにみている国制史的視点からばかりでなく、ギリシアの生の基盤としても、またたとえば美術や生に様式を与えするという文化史の意味でも、さらには思想史的観点からも、ブルクハルトのポリス記述には汲みとられるべき多くの洞察が含まれている。

プラトンのユートピア的国家像に対する代表的批判者としてのブルクハルトの諸発言は、かれのポリス観のこのような多面性と流動性の上になつてはじめて理解されうる。ブルクハルトがポリスの絶対的主権を強調していただけならば、かれのいう「個人を完全に廃棄して、全体者にひたすら帰一」^⑤させるプラトンの思想を非難する余地はない。おそらくこの非難の言を捉えて、ギリシア教育思想の頂点をプラトンにみるW・イーガーは、ブルクハルトが「古代ポリスの理想に對して辛辣な批判」をしたというが、これはかならずしも当たっていない。ポリスは「正しく、幸福に、高貴に、できる限りアレテーに従って生きる」^⑥場であり、市民に對して「教育力」をもつとする点、またポリスの教育理想は貴族的風習から発しているとする点で、ブルクハルトはイーガーの主題を先取りしている面がある。ただかれはプラトンが国家権力によって事態を定着させようとする「強引さ」^⑦と、ポリスのもう一つの力である個人を無視することとに反對しているのである。

ブルクハルトはプラトンのユートピアには反對するが、プラトンを代表的論者の一人とするデモクラシー批判には賛成であり、この面についてのブルクハルトの記述は先駆的業績といえるであろう。プラトンの政治観について論じているR・マウラーはアテナイ・デモクラシーの状況について批判するブルクハルトの言をしばしば引用している。^⑧ A・H・M・ジョーンズは古代におけるデモクラシー批判についての客観的研究で、プラトン、アリストテレス、イソクラテスなどデモクラシー批判者の論拠として、(1)好むままをする自由、(2)無差別的平等、(3)法に代つて人民の多数が主権者となること、(4)富める少数者に対する貧しい多数者の利己的支配の四点をあげている。^⑨ ジョーンズはブルクハルトの名を挙げていないが、これらのいずれも『ギリシア文化史』では見落されていない。もっともブルクハルトはデモクラシーの単純な

反対者ではなく、それがギリシアにとって不可避かつ必要な制度であったことを充分に認めている。

以上『ギリシア文化史』に含まれる洞察や主張のうち、筆者の気づいた範囲で重要と思われるものについて、以後の研究との関係をおのべてきたが、もちろんこれで全部だというわけではない。

ニーチェとの相互作用によって形成された「悲劇の誕生」についてのかれの叙述は、もっとも有名なものの一つである。ディオニッソスの祭典におけるサテュロス・コーラスがギリシア悲劇の母体となったということは、アリストテレスが有利な証言を与えているが、現存している悲劇作品の本文にも、他の史料にも直接的証拠をもたず、本来この問題の真偽は確認されがたいものかもしれないが、ニーチェ・ブルクハルト説が今日もなお有力な学説であることは確かである。

W・ケーギが、ドロイゼンはヘレニズムをおもに政治・軍事の面からみているのに対して、ブルクハルトは「ヘレニズム的人間」について語り、この語に、文化史的社会的意義を与えた、としているのは見逃せない^④。

最後に、現代における古代経済史の権威、ことに奴隷制研究の第一人者であるM・I・フィンレイの言を紹介しておく。「ヴィラモウヴィッツはブルクハルトの『ギリシア文化史』を、悪名かくれぬが影響力大きい非難の言をもって退けたが、そのブルクハルトが『歴史的発展におけるポリス』と題する部分で、奴隷制に一章を割りふる価値があるとみなしたことを、とくに申し添えずにはおれぬ^⑤。」

① Jacob Burckhardt, *Griechische Kulturgeschichte*. Herausgegeben aus dem Nachlass von Jacob Oeri. Berlin / Stuttgart 1898 / 1902 (1. und 2. Bd. 1898; 3. Bd. 1900; 4. Bd. 1902). 全集版 (*Gesamtausgabe*) ㉔ Bd. VIII-XI. 著者集 (*Gesammelte Werke*) ㉔ Bd. V-VIII に収められている。なお以下 Gr. Kg. を略記し、ページ数は著者集によって示す。

② ブルクハルトのルネサンス観に対しては、そのルネサンスの近代性強調に対する「中世学者の反乱」、ブルクハルトにおいて不足してい

た社会経済史的面からの研究、人文主義解釈をめぐる異論など、ほとんどがブルクハルト批判から発している。少なくともそれを含んでみると、えらう(ルネサンス概念史については、Ferguson, Huizinga, Kristeller などの論述がある)。しかしそれらはブルクハルトの修正補充であっても、超克ではない。もっとも社会経済史、都市史、科学史の研究はブルクハルトの考察とは独立に進められているとみられるが、これらに対しても、本来美術・文化概念であるルネサンスが、社会経済や都市の構造説明、あるいは科学的業績の照明によってどこま

年、四六頁。

- ① Neumann, op. cit., 194 Anm. 1. N. Y. Ton J. Beloch, *Griechische Geschichte*, I, 224 ff.; Ed. Meyer, *Geschichte des Altertums* 2, 551 A を指示してゐるが、おそく版の違ひがあるため、その箇所は「ギリシア人の不幸」についての発言を見出すことはできなかった。
- ② Gr. KG., Bd. VI, 360.
- ③ 藤縄謙三「芸術家の社会的地位」『ギリシア文化の創造者たち』所収、筑摩書房、一九八五年、三三〜九二頁、とくに五九頁以下。
- ④ Kaegi, op. cit., Bd. VI, 346.
- ⑤ ガントナーは、古典古代を規準とするブルクハルトの古典主義がなぜヘルガモンの祭壇彫刻やヘロック美術を評価しえたかを、ヴェルフリンの古典概念との比較で論じてゐる (Joseph Ganther, *Schönheit und Grenzen der klassischen Form*, Wien 1949, 35 ff.)。
- ⑥ Wilfried Gawnka, *Die sogenannte Polis*, Stuttgart 1985, 162 ff. ポリスの構造、ことに社会経済的構造の面からするその把握は多様な変遷を示しており、この歴史については、村川堅太郎教授の長年を費した周到な概観がある (村川堅太郎古代史論集Ⅲ「岩波書店」一九八七年、二七〜四四頁、一五七〜一七九頁)。
- ⑦ V. Ehrenberg, Von den Grundformen griechischer Staatsordnung, in: *Polis und Imperium*, 106; Ders., *Der Staat der Griechen*, 306. 同じように、ブルクハルトのポリス概念の事実に異議を唱へつゝも、そこにまた「ほとんど天才的構想」を認めるのは Hermann Bengtson, *Griechische Geschichte von den Anfängen bis in die Römische Kaiserzeit*, 4 Aufl., München 1969, 11.
- ⑧ H. Schaefer, Besprechung von V. Ehrenberg, *Der Staat der Griechen*, in: *Probleme der alten Geschichte*, Göttingen 1963, 384—400.
- ⑨ Ehrenberg, Von den Grundformen griechischer Staatsordnung, 106.
- ⑩ Gawnka, op. cit., 26. ガヴァントカの「ポリス」批判のちよな論点をあえてとりたせば、(1)「ポリス」概念はブルクハルトの「非学問的」考察にもといて一般化したもので、ギリシアの国家諸形式の実証的帰納的研究にもといて造られたものではなからこと (12 ff. Vgl. 185 ff.) (2)ギリシアの *polis* と違つて、ヘイト語の *Polis* は古代の現実そのままではなく、近代人の願望や先入見が混入されてなり (24, 188)。(3)ヘイト語が含まれてゐること (25)。(4) *Polis* の一語で國制研究の領域が総括されうと信じられてゐること (27) の三点が注目される。ブルクハルトとの関係で、ここではとくに(1)が注目される。
- ブルクハルトのポリス概念については、それが一〇〇年以上前の所産であり、ギリシアの諸国家、諸地域についての研究が細密化してゐること、疑問や批判がでてくるのは当然であろう。ブルクハルトの「ポリス」はアテナイやスパルタの国家像を基につくられた類型であり、それと異質な国家的現実には適用されがたいものがある。ポリスを都市共同体とみること (Gr. KG., Bd. V, 57) 自体、スパルタの農村的現実との関係——ブルクハルトはそれを記述してゐるが——で批判されてゐる (E. Schwartz, *Ehnik der Griechen*, Stuttgart 1951, 28 f.)。しかし「ポリス」に問題があるからと、ゴッショーファーやフィッティングホッフのように、その使用をやめて、*Staat* や *Gemeinde* という語を用いる場合も、失うものは少なくある。
- とまかく今日の研究状況のなかで、ガヴァントカが望んでゐるものに、もっと帰納的方法にもとづく他の類型の形成や各政治単位ごとの個別的記述も必要になると思われる。これは今日の学問研究が当然取り組まねばならない課題である。とはいえ、ガヴァントカのように、

ブルクハルトの探求・記述の方法が今日の学問形式に合わないから非学問的であるとか、半ば歴史小説だとして批判するのは、歴史とは何かについての無知を示す以上の何ものでもない。このような批判はなほブルクハルトのポリス観が革新する力をまったくつぎひることの証拠でもあろうが、歴史学がただ「厳密性」を旨とする批判的実証主義だけでなく、文化史や社会史も、また現代の社会思想家たるマルティン・ヘーゲルの評価も、すべて無意味となる。われわれが一〇〇年以上も前のすぐれた歴史記述に面するとき、必要なことは、それを実証主義の欠如ゆえに批判することではなく、それが何を与えたか、またわれわれに何を与えうるかを中心に留めながら、そこに含まれた洞察からわれわれ自身の学問を促進するものを汲みとらうと努めることである筈である。

⑳ Rudolf Stadelmann, Jacob Burckhardts Griechische Kulturgeschichte, in: *Die Antike* VII (1931), 57 ff. ヴンターマンの理解に対する批判は Karl Löwith, *Jacob Burckhardt*, Luzern 1936, 363 ff. ショーターマンは別の論文でマンテンの世世観と『世界史的考察』について、少なからず傾聴すべき知見を示しているが、このマンテンのポリス観についての淺薄な把握は、讀者の眼からみて、同一人の作とは思えない程である。それは、ポリスの絶対性強調を批判するトウを通じて、当時権力の座に居つていたナチスを批判してゐたこととのため、許容せざるを得ないのである。

㉑ Fustel de Coulanges, *La cité antique*, 16. edit., Paris 1898, 237 sqq., 265 sqq. 田辺貞之助訳『古代都市』白水社、昭和十九年、上巻三六八頁以下、四〇七頁以下。

㉒ Gr. KG., Bd. V, 77.

㉓ Ibid., 80, 216.

㉔ Ehrenberg, loc. cit.

㉕ ヲベジツツツツ、ツベジツツツツを参照。 Erik Wolf, *Griechisches Rechtsdenken*, Frankfurt am Main 1968, Bd. IV, 1, 24, 28.

㉖ Gr. KG., Bd. V, 264.

㉗ Werner Jaeger, *Praise of Law: The Origin of Legal Philosophy and the Greeks*, in: *Scripta Minora*, Roma 1960, II, 333.

㉘ Gr. KG., Bd. V, 74.

㉙ Ibid., 76.

㉚ Ibid., 160.

㉛ Ibid., 265.

㉜ Reinhart Maurer, *Platons 'Staat' und die Demokratie*, Berlin 1970, 44 Anm. 12, 166 Anm. 37, 184 Anm. 10. 同書46頁以下、註文を引く。 Carl W. Weber, *Athen, München* 1981, 288, 292.

㉝ A. H. M. Jones, *The Athenian Democracy and its Critics*, in: *Athenian Democracy*, Oxford 1966, 41-72.

㉞ Gr. KG., Bd. VII, 189 ff.

㉟ Aristoteles, *Poet.* 1449 a 10, 20 f. (Kassel).

㊱ ケーギツ『禁制の誕生』の発刊経緯は、トキリトンス祭儀について、ニーキム以前に Otto Ribbeck & Wilhelm Vischer の『ケルン・ヤーンの古史学者の研究』があるように、その成立は、ニーキムの古史研究を基礎として (Kaegi, op. cit., Bd. VII, 35 f.)、その『ニーキム』の『禁制の誕生』をめぐり問題になっている。『ニーキム』第二部、中央公論社、昭和五十二年、三〇三頁以下参照。

㊲ Ibid., 94. ヲベジツツツツ、ケルニム概念史についての近著のなかで、ケルニムとマンテンとのケルニム概念を対比して、論

275 n° Reinhold Bichler, 'Hellenismus': *Geschichte und Problematik eines Epochenbegriffs*, Darmstadt 1983, 128 ff., vgl. 179 f.

⑤ M. I. Finley, *Ancient Slavery and Modern Ideology*, Penguin Books 1983, 162 n. 122.

二

『ギリシア文化史』の意義と特質を見定めるためにはそれが古代研究の歴史のなかでどのような地位を占めていたかを概観してみなければならぬ。

この書がルネサンス以来の古代研究の大きな流れの中にあることはいうまでもない。思想・文化に対する宗教の支配が長く続いたドイツでは、他の西欧諸国と比較して古代への本格的関心が目覚めるのはおそかったが、ヴィンケルマン以来堰を切ったような古代への傾倒が始まり、それはドイツ古典主義の強力な索引力になった。ヴィンケルマン、ゲーテを中心とする古代熱には、ペトラルカやエラスムスの人文主義、あるいはフッテン、オーピッツなどかつてのドイツ人文主義とは異なる特徴があった。これらではホラティウス、キケロ、タキトゥスなどラテン作家が理想像であったのに対して、ヴィンケルマン、ゲーテでは中心にあるのはホメロスとギリシア美術であった。^①このギリシアとドイツとの特別な関係は大筋において二十世紀まで続く。つぎに注意しておかねばならないのは、ゲーテたちは大学人ではなく一般の知識人であり、ギリシアを学問的研究の対象とするよりも、それを自己の生と芸術を形成する規範とみていたことである。ゲーテにとってホメロスはまず世紀の重みからの解放力、^②フランス文化の束縛から脱して根源的創造へと導く力であった。

このようなドイツ古典主義の古代観は W・v・フンボルトによって創設されたベルリン大学のなかにも植えこまれた。それを担ったのが近代ドイツにおける古典文献学の創始者とされる F・A・ヴォルフである。フンボルトとヴォルフはゲーテのいっていたような生ける理想としてのギリシアを学問化したわけで、かれらは「格別に古代人における形成の意義を重んずる視点」^③にたっていた。しかし、ホメロスの作品は数人の作者の手になるというヴォルフの原典研究に対して、

詩人としてのゲーテが示した反発^④には、ヴォルフの推論が結果的に正しかったか否かという問題とは別に、形成の規範を中心におく人文主義と、客観的事実を追求する学問との間に、相容れない側面があることを露呈している。しかもこのいずれを無視しても古典文学は成立しなくなるというところに、今日にまで続くこの学問の宿命的な性格をみることができるのである。

ベルリン大学でヴォルフについて古典文学を講じたのは、ブルクハルトの師アウグスト・ベックである。ヴォルフやG・ヘルマンなどかれ以前の文献学者が原典批判、言語研究、文学史などに主力を注いだのに対して、ベックは対象の面でも方法の面でも文献学の領域を大きく広げた。かれの考察は国家に重点をおいているが、さらに家族やその他の私生活、宗教、詩、歴史、学問、技術など広範な領域にわたっている^⑤。かれは碑文学、考古学、古銭学など新しい研究方法もとり入れて、古代を総合的に研究する古代学(Altertumswissenschaft)の基礎をおいた。ベックによって文献学はいっそう学問的になると同時に大いに歴史化した。ギリシアは一つの歴史的関連であり、そのなかにいっさいの個別的歴史的事象が含みこまれるという認識にむかって、文献学が大きく一歩あゆみだしたことは確かである。かれのもとで『ギリシア碑文集』(Corpus Inscriptionum Graecarum)の蒐集事業も進められた。しかしベックはハレ大学でヴォルフの影響のもとに文献学徒となった人であり、^⑥ゲーテ時代の精神にふかく浸透されていた。かれはギリシアを歴史のなかの一時代として無差別に研究したのではなく、考察の中心をアテナイ盛期においた。ケールストによると、かれにとってギリシアは「真に古代的なもの、あるいは規範として古代的なもの」であり、古代概念は「あまりに一面的にいわばそれ自体で完結したもの、自立、自存している生命内容として、一般的な歴史の流れから外にとりだされている」^⑦。つまりそれは歴史的存在であると同時に規範的な性格を失っていない。ベックでは人文主義はまだかろうじて歴史主義に拮抗していたことができるかもしれない。

このベック、ヘルマン、O・ミューラー、F・G・ヴェルカーなどはヴィンケルマン、ゲーテ、フンボルトのギリシア

愛を学問として展開しつつ、古典文献学の最初の隆盛期を築いた。しかしE・シュヴァルツやイエーガーがいうように、その後十九世紀の五十年代、六十年代、あるいはさらに七十年代にかけて、ギリシア研究の領域には沈滞と危機の時期が訪れる^⑧。この時期、重心はラテン語に移って、隆盛のリッチェル学派とともに、モムゼンが巨人的な活動を展開する。モムゼンは碑文学とローマ法の知識にもとづいて、新しい厳密なローマ史記述をうみだした。かれがローマ史を選んだということは、規範としての古代の意味が変わって、人格形成よりも国家形成に重点が移されたことを意味する。かれはみずから理想とする共和国ローマにならって、ドイツ国民国家を創造しようとしたのである。

ところでわれわれにとって当面重要なのは、ニーブール、ドロイゼンについてかれが進めた政治史的古代研究よりも、かれが推進した研究方法である。モムゼンはスイスを好まず、チューリヒ大学を去ったが、かれには大国家、大都市が必要であった。ベルリンはかれの学問にふさわしい場である。「学問もまたそれなりの社会的問題をもっている。大国家や大企業と同じように、大規模な学問は一人によってなすとげられるのではなく、一人によって指導される。こういう学問は今日の文化発展にとって必要不可欠な要因なのだ。」^⑨かれの大事業である『ラテン碑文集』(Corpus Inscriptionum Latinarum)はプロイセン科学アカデミーの援助をえて、部厚い二つ折版で十六巻に達した。しかもこれらの蒐集事業および活版な政治活動と並行して、『ローマ史』、『ローマの国法』などの大著から小品まで含めると、実に一五―一三点を教えると思われる膨大な業績を残している。このあくなき歴史的探求は、イエーガーがいうように、まさにギリシア文献学の上に、「逆作用」を及ぼした^⑩。そこに登場したのが、モムゼンの娘婿ヴィラモーヴィツ・メレンドルフにほかならない。

ヴィラモーヴィツの学問を特色づけているのは、まずその探求領域の広さである。かれは文学、哲学、歴史、国家、社会、宗教などギリシアに関わるあらゆる事象を研究対象としてとりこみ、晩年はギリシア語のキリスト教文献までかれの包括的な古代学^{プログラム}の計画のなかに含めた^⑪。かれはこの博大な知識を概観的に叙述するには向いていなかったが、個々のものを解釈によって蘇らせようとしたのである。かれの学問の背後にはギリシアへの愛があるとしても、それはギリシアを理

想として自己を形成する愛ではなく、知的愛であり、あるいは知的探求への愛である。K・ラインハルトは、ヴィラモールヴィツにあるのは古代、あるいは古代の作家に対する敬虔さではなく、自己の学問の遂行に対して、あるいは自己の学問の理念に対していただいている敬虔さだ、という。これはたしかにラインハルトのいうように「あらゆる人文主義の終り」^⑬であろうが、しかしまたこの巨匠の各方面にわたる研究と解釈によって、古代学が一頂点を築いたことは畏敬の念をもって顧みられるに価しよう。

さて、以上の文献学的古代研究の流れに対して、ブルクハルトはどのような位置を占めていたであろうか。かれの前にはG・グロートの『ギリシア史』があり、また一八五七年にはE・クルティウスの『ギリシア史』の第一巻が出されたが、これらの歴史記述によってブルクハルトが大きな影響をうけたようには思えない。^⑭かれのギリシア研究に最大の影響をあたえたのは、ベルリン大学における師ベックである。さらにボン大学における師ヴェルカーとベックの高弟ミューラーも少なからざるものをあたえている。これら三人は古典文献学における隆盛期を築いた人びとであり、ギリシアを規範とみる思想と人文主義的精神とを保持していた。

ギリシア史に対する願望は若年からブルクハルトの胸に宿っていたに違いない。「二百年の間古典の教養が専制的にいいたてられてきたにもかかわらず、いまなお納得できるギリシア史が存在しないのは、嘆かわしいことではないでしようか。」^⑮と旧師ハインリヒ・シュライバーに述懐したのは、一八四三年、かれが二十四才のときである。W・ケーギが『ギリシア文化史』の最初の着想がうまれたとみているのは、その四年後である。^⑯以後この構想は少なくとも外見上は後退したようにみえるが、六十年代に入って再燃する。六十年代末からそれは具体的なものとなり、一八七二年には最初の講義が始まるが、このときには、すでに終章「時代の発展におけるギリシアの人間」の構想は出来上っていたようである。^⑰こうしてみると、青年期に古典文献学の第一期の大家たちの教えをうけて以来、ブルクハルトはギリシア文献学の衰退期において、『ギリシア文化史』の構想を育て、実現したのだということがわかる。かれと並行して活躍していた大家は、

ランケ、ドロイゼンを別とすれば、モムゼンとジーベル、後からトライチユケで、いずれもギリシア以外の領域の研究者である。ウィラモーヴィツが処女作『アナレクタ・エウリピデア』を発表したのは一八七五年であり、当時はまだ無名の少壮学者にすぎなかった。

このようなギリシア研究の衰退期において、ある意味では必然的に、ブルクハルトはまさにウィラモーヴィツがいうように、十九世紀後半における古代研究の成果を「無視」して、原典の深い読みと理解の上に、独自のギリシア像を形成したのである。『ギリシア文化史』はおおむね国家、宗教、文化という、かれの三つのポテンツに従って叙述されている。この三ポテンツの萌芽を含む文化史の方法的諸思想、それにもとづくギリシアの生の多面的記述、さらに横断面的考察の点で、ベックの強い影響を認めることができる。のみならずベックには同時代のモムゼンなどの政治家からはほとんど消えていた人文主義の精神と、ギリシアに理想的形成力をみる思想とが息づいていた。これはヴィンケルマン、ゲーテからベックまで継承されてきたドイツ古典主義の遺産にほかならない。

しかし『ギリシア文化史』はあくまで歴史であって、文献学的業績とは区別される。ブルクハルトにとってもつとも典型的理想的なものは神話、ことに英雄叙事詩である。この点でかれは、アテナイの盛期に中心をおいたベックよりも、ヴィンケルマン、ゲーテに近い。しかも注目すべきことは、ブルクハルトの神話的ホメロスの典型は人間形成の規範ではなかったということである。それはかれのもとで歴史の根源的形成力に改鋳された。いいかえれば、ブルクハルト的仕方で歴史化されたのである。この点をもう少しよくみてみよう。

『ギリシア文化史』は最後の「ギリシアの人間」の章を除いて、三ポテンツに従って叙述されているようにみえるが、その前に第一章「ギリシア人とかれらの神話」がおかれていることに注意しなければならない。この「神話」は、祭儀や宗教的思想内容を扱った第三章「宗教と祭儀」とは区別される。神話は「ギリシア人の全存在の理想的基底」であり、国家、宗教、文化の三ポテンツのすべてに浸透し、すべてを特色づける力である。それはソフィストの活動以後衰えたとは

いえ、ヘレニズムまで死滅することはなかった。アレクサンドロスや哲学者においても神話の輝きや残光を認めることができる。のみならずブルクハルトにとって、この神話はヨーロッパそのものの特性であった。「われわれの文化が偉大なギリシアの神がみの類型をもちや美しいと思わなくなるときは、野蠻が始まっているのであろう。」^⑧という言葉はそれを証している。

歴史家であるブルクハルトは神話を中心におくギリシアの典型を、高みにある生の規範としてよりも、ヨーロッパ史の根源的形成力としてみたのである。この根源力はギリシアの生の多様な展開を推進するとともに、ヨーロッパ史の連続性を支えている。かれはローマのギリシア愛がヘレニズム文化を受容した幸運を、くりかえし強調している。^⑨神話を根底にもつギリシア文化は連続性の根本要因である。この意味で、ブルクハルトは一方でベックのギリシア愛とギリシアの生についての横断面的考察と、他方でランケの世界史的把握と歴史の縦断面的考察とを結びつけたことができる。かれはギリシア的理想を高く掲げながら、それが個人の人格によりも、ヨーロッパ史の中に植えこまれる面を重くみただけである。これは、ギリシアの理想化と歴史的思考との関連と相克という、古典文献学が負った宿命的難問に対して、かれが示した一つの解答とみることもできよう。

- ⑧ この「ギリシアの神がみの類型をもちや美しいと思わなくなるときは、野蠻が始まっているのであろう。」という言葉はそれを証している。
- ⑨ August Böckh, *Die Staatsverwaltung der Athener*, Berlin 1817, p. 110 f. (Tag- und Jahreshefte, 1820).
これは知的には研究の結果を認めても、感情的にはホメロスの詩を一体的に捉える「ところ」(Tag- und Jahreshefte, 1820)。
- ⑩ August Böckh, *Die Staatsverwaltung der Athener*, Berlin 1817, p. 110 f. (Tag- und Jahreshefte, 1820).
これは知的には研究の結果を認めても、感情的にはホメロスの詩を一体的に捉える「ところ」(Tag- und Jahreshefte, 1820)。
- ⑪ Werner Jaeger, *Philologie und Historie*, in: *Humanistische Reden und Vorträge*, 2. Aufl., Berlin 1960, 15.
- ⑫ Jaeger, *Antike und Humanismus*, in: *Ibid.*, 107.
- ⑬ 「ヤケルプはホメロスを粉々にしたが、詩人は回らぬ舌を加え、心とはじみなかった。」とてウゲナーの言(Eckermann, 1. 2. 1827)か
- ⑭ Kaegi, *Ibid.*, 49.

- ② Julius Kaerst, Die Geschichte des Altertums im Zusammenhange der allgemeinen Entwicklung der modernen historischen Forschung, *Neue Jahrbücher für das Klassische Altertum*, 5 Jg. (1902), Bd. 9., 44.
- ③ Eduard Schwartz, An Ulrich v. Willamowitz-Moellendorf, *Die Antike* 5 (1929), 3 ff.; Jaeger, Ulrich von Willamowitz-Moellendorf, in: op. cit., 216. 危機の時代をシテヴァルツは一八六〇・七〇年代とシテケーガーは一八五〇・六〇年代とシテ。
- ④ Albert Wucher, Theodor Mommsen, in: *Deutsche Historiker* IV, Göttingen 1972, 11.
- ⑤ Zangemeister v. Jacob *Gr. u. Lat. Sprachlehre* 245 ff. (Hermann Bengtson, *Einführung in die Alte Geschichte*, 8. Aufl., München 1979, 12)°
- ⑥ Jaeger, loc. cit.
- ⑦ Ibid., 217.
- ⑧ Karl Reinhardt, Die Klassische Philologie und das Klassische, in: *Vermächtnis der Antike*, Göttingen 1960, 347. Vgl. 365 ff.
- ⑨ Grote *Gr. u. Lat. Kaegi*, op. cit., Bd. VII, 19 ff. Curtius *Gr. u. Lat. ibid.*, 26 ff. フルトンハルトはクルティウスノ著作には敬意を込めた。フルトンハルトノキリシム観とは相容れなからず。
- ⑩ Burchardt, *Briefe*, Basel 1949, Bd. I, 218, an Heinrich Schreiber vom 2. Oct. 1842.
- ⑪ Kaegi, op. cit., Bd. VII, 4.
- ⑫ Ibid., 7.
- ⑬ Gr. KG., Bd. V, 35. Vgl. 31.
- ⑭ Burchardt, *Gesamtausgabe*, Berlin und Leipzig 1934, Bd. XIII, 14.
- ⑮ Gr. KG., Bd. VIII, 519, 532; *Weltgeschichtliche Betrachtungen*, Darmstadt 1962, 65. Vgl. Gr. KG., Bd. VIII, 269, 502.

三

『ギリシア文化史』がギリシア研究者の間でどのような評価をうけてきたかについては、E・M・ヤンセンが、遺漏ないわけではないがかなり丹念に、個々の評者の言を引きながら、おおむね時間の流れに沿って跡づけている。^① またW・ケーギの同様な論述もある。^② したがってここではなるべくそれらと重なることは避けて、『ギリシア文化史』評価の主要な特徴と変遷、またそれらの意味に注目してみよう。

『ギリシア文化史』が世に出たときから専門家の間で拒まれたという印象をもたれたとすれば、その最大の原因は、はじめの二巻が出版された翌年におこなわれたウィラモーウィツの評言にあることは間違いない。この書は「学問のた

めに存在しているのではない。」「原史料、事実、方法、視点の点で、最近五十年間の学問が獲得してきた成果を無視している。」^③というかれの言は、その批判の特徴をよく示している。

ブルクハルトはベックの総合的ギリシア研究を継承、発展させたが、ベックのもう一つの仕事である『ギリシア碑文集』の成果をほとんど利用していない^④。後者の面を継承発展させた人こそ、ヴィラモーヴィツにほかならない。かれはギリシア文献学のいわゆる「沈滞期」において一般的であった原典の恣意的解釈を斥けて、原典の批判、校訂、解釈に力を注いだ。碑文尊重は当然その延長線上にある。この客観的批判的研究態度はかれが当時のすぐれた古代史家たちと共有していたものである。『ギリシア文化史』の出版と相前後して、G・ブーズルト、K・J・ペロツホ、E・マイアーなどの批判的ギリシア史研究が続々と公けにされた^⑤。そのなかの一人、マイアーのブルクハルト批判はヴィラモーヴィツよりもいっそう辛辣である。かれは「休みなく前進し、方法的に修練された十九世紀の研究」に敬意を表する者として、ブルクハルトの『ギリシア文化史』を「まるまる一世紀の仕事全部無視して、ギリシアの発展の像を構想する試み」とみなしており、この点、ランケの『世界史』と同断だと評している^⑦。

しかしこの二人の大家の評価が全体を覆ったというわけではない。いっそう批判性を重んずる古代史家ペロツホは、経済的根底を無視しているがゆえに、今日では時代後れになっているとしつつも、『ギリシア文化史』には「いたるところ繊細鋭敏な観察が含まれている」ことに注目する^⑧。A・ホルムも同じ欠点を認めつつ、学問的著作よりも芸術作品だと断じて、いっそう厳しい見方を示すが、「本質的に刺戟的な」働きがあることを容認している^⑨。これらはともかく半面の価値は認めているといえよう。

これらの批判的見方に対して、『ギリシア文化史』の高い価値を逸早く力説したのはC・ノイマンである。かれは当時ハイデルベルク大学の私講師であったが、『史ヒストリー学ツァイトシュラフト雑誌』に長文の論評を公けにした^⑩。ノイマンの解釈は深く内在的で、今日読んでもいささかも色褪せていない洞察に富んでいるが、もう一つ注目すべきは、この書が将来理解され、い

よいよ感謝して受容されるようになるであろうことを予言している点である。当時このようなノイマンの見方は孤立していたわけではない。F・M・フェルスはブルクハルトの記述が古代人の著作に基づいているゆえに古びないとしながら、全体的に好意的見方をしているし、ケールストも歴史的生のいっそう深い理解に影響を及ぼしたという点から、肯定的評価を示している^⑩。ほかに、ブルクハルトがギリシアの民主主義の暗い面をも描いて、その理想的美化を修正した点に注目するR・v・ペールマン^⑪、客観的立場にたちながら、ブルクハルトの「繊細で高い資質をもつ精神」^⑫、「諸民族の特性的なものを捉える眼」、「追感の能力」、「視界の普遍的広さ」などを認めるG・ビッレター^⑬がいる。

以上『ギリシア文化史』の最初の出版以後五年以内の評価を概観したが、ケーギによると、それに好意的評価を示した人には他に、イエナのハインリヒ・ゲルトツァー、テューリヒのゲロルト・マイアー、ランケ門下のアルフレート・ドールヴエがおり、他方批判者にはレオ・プロッホがいる^⑭。こうしてみると、肯定的に評価する史学者は少なくなく、『ギリシア文化史』は出現と同時に専門家によって拒絶されたというのは、当たらないかにもえる。実状はどうだったのであろうか。ケーギがいうように、ヴィラモーヴィツは歴史家ではなく、ドイツの史学界を代表する『史学雑誌』がノイマンによって高い評価を与えているので、この書が専門家の間から追放されたというのは正しくない、とみてよいのであろうか。

実状を知ろうとする場合、これまでヤンセンやケーギがしたような諸家の評言の列挙がどこまでそれを示しうるかには、疑問がある。大切なことは表てに出た声ではなく、ましてその表明された意見が賛成反対いずれの側に多かつたかではない。意見は賛否の理由を示唆するにすぎない。この場合のわれわれがまず注目すべきものは、当時におけるギリシア研究の潮流である。古典文献学におけるヴィラモーヴィツの歴史的批判的研究の重みは時とともに圧倒的なものとなる。かれの名声の高まるのはむしろおそく、ラインハルトによると、ドイツでよりもイギリスで広く認められたほどだが^⑮、二十世紀が進むにつれてしだいに指導的地位を確立し、ほぼ四半世紀の間ドイツの古代学会に王者のように君臨することになる。これはもちろんかれの巨人的活動によるものといえるが、同時にかれの研究が時代の傾向のなかに深く根差していたこと

によるであろう。批判的実証主義は古典文献学を捉えたばかりではない。それを根づかせ、成長させていったのは、むしろ歴史学の方であろう。ヴィラモーヴィツが推進した碑文学の豊かな成果ばかりでなく、パピルス学、古銭学の新しい成果をも大いに利用して、社会経済史、法制史、国制史の方向に、自信をもって客観的研究を展開していったのは、古代史学にはかならない。

こうしてみると、『ギリシア文化史』に対するヴィラモーヴィツやマイアーの批判は、世紀末から今世紀の二〇年代までいよいよ支配的になりつつある時代の学問の主流から発せられたものであることがわかる。巨匠が断言したことは、あえて繰り返されるには及ばない。『ギリシア文化史』支持の声は個人から発せられたが、批判の声は時代からおこった、といってもよからう。後者の裾野はさだめし広かったに違いない。

一九二〇年代、ことに三〇年代に入ると、『ギリシア文化史』に対する見方に変化がみられるように思われる。一九二九年から三四年にかけて、ブルクハルトの全集が出版され、『ギリシア文化史』がその第八巻から第十一巻に収められたことはそれを傍証する出来事だが、さらに注目すべきことは、一九二九年に『ギリシア文化史』のクレイナー版(ポケット版)がルドルフ・マルクスの後書きをつけて刊行されたことである。これはこの書に対する一般の関心の高さを示している。エリーザベト・コルミは三〇年代を「ブルクハルト・ルネサンス」と呼んでいる。『ギリシア文化史』についても、以後批判の声は低くなり、評価は時とともに高まってゆくように思える。そこで以後の評価の歴史はヤンセンなどに任せ、ここではこのようにブルクハルトおよび『ギリシア文化史』に対する見方の変化があったとして、なぜそれがおこったのかを考えてみよう。第一次世界大戦後ドイツを見舞った各方面にわたる変動が無縁でないことは容易に推察される。またノイマン、W・レーム、A・v・マルティンなどをはじめとするブルクハルト研究者たちの活動、さらにトレルチ、ヴェルハウゼン、マイネッケ、ホイジンガなど一流の学者たちのブルクハルトに対する深い尊敬と愛着も無視できない。しかしここではこれまでの論述との関係で、ドイツの歴史研究における思考と方法の変化に焦点をあてて考えてみた

い。
 歴史における批判的実証的方法がランケ以来確立されたものであることはいうまでもない。この方法は十九世紀の後半に入ると、いよいよ精緻になるとともにある意味では登りつめて、一八八〇・九〇年代には個々の事件に重点をおいて、それを実証し、記述する政治史にあきたりず、もっと集合的な「状態」、一般的な「類型」に視点を合わせる文化史がゴートハイン、ランプレヒトによって主張される。そこにおこるのが有名な「ランプレヒト論争」で、ランプレヒトは伝統史学の側からの総攻撃をうけて、広い支持をえられなかったが、歴史の類型学的考察は、ドイツでは歴史学においてよりも社会学として、のちに大いに発展する。他方歴史学の内部では、正統史学の最後の代表者マイネッケが理念史、精神史に新境地を拓いてゆく。精神史はドイツ語圏では政治理念においてばかりでなく、宗教、美術、哲学、文学など各方面において大きな成果をあげたことは、周知の通りである。

以上の流れの中でヴィラモヴィツとかれにならう文献学者たち、またブーゾルト、ペロツホ、マイアーなどの古代史家たちが批判的実証主義の流れをついでいることは明らかである。このうち少なくとも歴史家たちは、K・ホイシがいう一九〇〇年ごろの歴史記述と年代的にも、特徴の点でも、一致している。それは事実を客観的絶対的なものとみて、史料批判によって確定された事実だけをとりこもうとする。これに対して、およそ一九一〇年代から三〇年代にかけて盛んになる歴史記述の傾向、たとえばマイネッケやクローチェの理念史に代表される史学思想は、一九〇〇年ごろの歴史記述がもつ四つの特徴のうち、つぎの二つでそれと相違している。つまり事実は一義的客観的に存在するというかつての見方に対して、事実はある一定の視点にたつてはじめて捉えられるもので客観的であると同時に主観的であるとする。また事実の領域にとどまるかつての歴史内在的立場に対して、理念という「超歴史」なものを歴史の対象に含めることによって、歴史内在的であるとともに歴史超越的である立場をとる。

これは事実観の変化といえるが、精神史、理念史においても事実の批判的確定が必要なことはいうまでもない。しかし

そこでは同時に事実をどう捉えるかが肝要であり、また理念という史料批判の扱い難い「事実」が中心におかれる。事實は外側から確定されるばかりでなく、内側からみられねばならない。^⑤このような事實観の転換を基底にもつ歴史的な思考と方法が『ギリシア文化史』において、「過去の人間の内面へと向かってゆき、かれらがどうあったか、どのように欲し、考え、みたか、またなしたかを告げ知らせる」ブルクハルトの方法に親近感を覚えるのは理解できるであろう。

さて、このような一般的傾向とともに、『ギリシア文化史』の受容にかかわるもう一つのギリシア史上の事実に触れておきたい。それはヘロドトス評価の変遷である。これと『ギリシア文化史』評価の動きとの間には並行関係というべきものが認められる。ヘロドトス評価の変遷については藤縄謙三教授の傾聴すべき専門的論考があるので、ここでは従来の論述との関連で、一九三〇年前後におけるその状況に限って瞥見することにした。

キケロは『法律について』の冒頭部（一、一、五）で、ヘロドトスを「歴史の父」と呼びながら、同時にかれの作品にはたくさん作り話があると、自分と同名の作中人物に語らせている。これはヘロドトスに、一方で歴史家としてきわめて名譽ある地位を認めながら、他方でその記述の事実性に不信の念を表明したもので、たいへん大雑把に言えば、このキケロのヘロドトス観がおおむね一九二〇年代まで受けつがれてきたようである。^⑥ヴィラモーヴィツの評価も厳しかったが、いっそう決定的であったのは、ヘロドトスの全体像のもっとも綿密な研究者であったF・ヤコービの評価である。かれはヘロドトスの古い宗教観が正確な事実の把握を妨げ、また歴史的関連や動機の認識を誤らせているとして、かれの作品を理想とは程遠い欠陥ある歴史叙述と断じている。^⑦

このようなヘロドトス観を根本的に転換すべきことを主張したのは、一九三〇年におけるO・レーゲンボーゲンの論文である。かれはヘロドトスの作品に対して「創造的行為の言表しがたい神秘に対して当然の畏敬の念をいだきながら」、^⑧その独自の意義を見出し、ギリシア精神史におけるその位置を見定めようとする。これはいわばヘロドトス再評価宣言で、かれはそれに従って一つの解釈を打出しているが、実は一九二〇年代からヘロドトスの内在的理解にもとづく研究は現わ

れていたように思える。たとえば、W・アリによるヘロドトスの民間伝承、伝説、説話についての丹念な研究^①、E・ホヴァルトの史学史的評価^②、F・フォケの密度の濃いヘロドトス研究^③などがそれである。さらに三十年代に入ると、先にのべたレーゲンボーゲンのあと、W・シャーデヴァルトの史学史的考察、F・ヘルマンのクロイソス説話およびアドラストス説話をめぐる周到な研究^④、K・ヴェュストによるヘロドトスの政治思想研究のあと、一九三七年にポーレンツのヘロドトス研究^⑤が出て、ヘロドトス評価の転換はほぼ完了する。

この再評価の方向をみると、ヘロドトスの記述は年代構成も含めてこれまで考えられていたよりも、はるかに正確だという認識、かれの宗教思想、倫理思想、政治思想の内在的理解が目立つ。が、それと並んで、ヘロドトスの史学思想の特徴として、ヒストリエーの根本衝動である偉大な事象の探求および内面化^⑥と、過去の全体的生にたいする普遍人間の関心^⑦とが着目されている。この二つについてはヤコービも指摘はしているが、三十年代以後、これらが積極的に評価されてゆく。ブルクハルトはヘロドトスの歴史叙述における逸話の意義を最高度に強調している^⑧。逸話を通して歴史的な生は典型的な表現的に示される。それはわれわれの立場で説明されるのではなく、その時代の人の眼で現前される。ブルクハルト自身『ギリシア文化史』の叙述において、たびたび逸話を利用して、逸話と過去の内面化と歴史に対する普遍人間の関心とはたがいに関連しながら、ヘロドトスとブルクハルトの歴史叙述を特色づけている。両者が同じく一九三〇年ごろを境として再評価されたのは、偶然とはいえない。

- ① E. M. Janssen, *Jacob Burckhardt und die Griechen*, Assen 1979, 1-15.
- ② Kaegi, op. cit., Bd. VII, 98-107.
- ③ Janssen, op. cit., 1.
- ④ Kaegi, op. cit., Bd. II, 53.
- ⑤ Schwartz, *An Ulrich v. Wilamowitz-Moellendorf*, 3f.
- ⑥ Georg Busolt, *Griechische Geschichte bis zur Schlacht bei Chaeroneia*, 3 Bde., Gotha 1893-1904; K. J. Beloch, *Griechische Geschichte*, 4 Bde., Strassburg/Berlin 1893-1904; Eduard Meyer, *Geschichte des Hellenismus*, 5 Bde., Stuttgart 1884-1902.
- ⑦ Janssen, op. cit., 2. H・ベナーは近年の研究を無視してごるといってブルクハルトの『ギリシア文化史』とランタンの『世界史』と

を同列におじているが、両者の史学的立場に則してみれば、『世界史』はランケ自身が確立した史料批判の方法からの逸脱だが、『ギリシア文化史』はブルクハルト自身の史学的方法の帰結である。

⑧ Ibid., 1 f.

⑨ Ibid., 2.

⑩ Carl Neumann, Griechische Kulturgeschichte in der Auffassung Jacob Burckhardts, in: *Hist. Zschr.* Bd. 85, 385 ff.; Bd. 91, 488 ff. (= *Jacob Burckhardt*, München 1927, 145-228).

⑪ F. M. Fels, Jacob Burckhardt über die Kultur der Griechen, *Deutsche Rundschau*, Bd. 98 (1899), 301 f.

⑫ Kaerst, op. cit., 49.

⑬ Kaegi, op. cit., Bd. VII, 100 f.; Janssen, op. cit., 5.

⑭ Kaegi, *ibid.*, 106.

⑮ *Ibid.*, 101 f., 103.

⑯ K. Reinhardt, Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf 1848-1931, in: *Vermächtnis der Antike*, 364 f.

⑰ 批判的実証主義は世紀の変わり目から第一次世界大戦までの間に多数の協力による、シュワリーの『古典古代学事典』、『ホルニッツのフリストテレス索引』、『シュヴァルトンの公會議記録集』、『ヤコービの歴史家断片集』のような、勤勉で丹念な編集、蒐集、整理の事業に代表される (B. Snell, *Klassische Philologie im Deutschland der zwanziger Jahre*, in: *Der Weg zum Denken und zur Wirklichkeit*, Göttingen 1978, S. 105-109)。

⑱ 第一節注①参照。

⑲ Janssen, op. cit., 7.

⑳ ケーギは、『ヴィラモローウィツが最初の二巻だけをみてブルクハルトを酷評したことを後悔し、一九三〇年ごろには『ギリシア文化史』に

対する評価を変えていた」と推定している (Kaegi, op. cit., Bd. VII, 104 ff.)。しかし一九三〇年代になっても、かつてのきびしい一般の評価が急変したのでないことは、ヴィラモローウィツを尊敬する文献学者シュヴァルトンの言をみても明らかである。それは軽く脚注で触れている言葉だが、それだけにかえて『ギリシア文化史』批判の底流を代弁していると思える。「ブルクハルトが卓越した学者であることは疑いない。しかしかれの思い出はギリシア文化史の講義録を出版したために傷つけられた。これは実にかれ自身の意志に背いて公刊されたものなのだ。ギリシアの生についてのかれの知識はもっぱら文献に依拠している。本腰入れた碑文の利用はまったくおこなわれていない。だから不幸なことだ、かれはなるほど輝かしい叙述家とはなっていないが、事実の点では多くの誤まりをおかしたのである。」 (E. Schwartz, *Ehrlie der Griechen*, Stuttgart 1951, 27 Anm. 4. 2)。

シュヴァルトンの書は一九三三—三五年におけるかれの講義の速記録を基にして出版された。) など、シュヴァルトンがいうように、Jacob Oeri による『ギリシア文化史』の公刊がブルクハルトの意思に反した処置であるか、については問題がある。この点は裁判でも争われ、Oeri 側は勝訴したが、これについては Kaegi, op. cit., Bd. VII, 16 f., 101 ff. Vgl. *ibid.*, Bd. VI, 886 f.

㉑ この点については、岸田達也『ドイツ史学思想史研究』ミネルヴァ書房、一九七六年、一〇九頁以下参照。ランプレヒトの主張はドイツでは孤立的であったが、ヘルギーのアンリ・ピロニヌやフランスのブナル派の歴史家たちに影響を与え、やがてフランスで成長した社会史がドイツ史学に逆作用を及ぼしている現状はわれわれのみる通りである。ドイツでは類型的考察を M. ヴェーバーを通して受容した存在として、オットー・ヒンツェがいるが、これはいわば、「ほとんど唯一の歴史家」(岸田、前掲書、五八頁) である。

- ② 代表的なものとして、たとえば Dilthey, Troeltsch の精神史的業績、宗教史の Harnack, 美術史の Wölfflin, Wickhoff, Riegl, Dvořák, Sedlmayr など。因みにスネルはかれの史学史的著作のなかで各章のよびで二十世紀前半の重点をなすたこの精神史の章に最大の分量をあげている (H. R. v. Strblh, *Geist und Geschichte vom deutschen Humanismus bis zur Gegenwart*, Bd. II, 245-310)。
- ③ Karl Heussi, *Die Krisis des Historismus*, Tübingen 1932, 93 ff.
- ④ Ibid., 38 ff., 103 ff. ホーエンは一九〇〇年頃の歴史記述の特徴として、(1) 事実な Gegenüber としての客観的存在するところの思想、(2) 歴史の対象を関連のなかに組みこむ相対主義 (個性性の思想)、(3) 歴史的發展の思想、(4) 事実の領域にとどまる歴史、(5) つかえれば歴史内在の立場、の四点をあげている。理念史はこのうち、(2) (3) (4) を継承するが、(1) (4) は異なる思想だといふ。
- ⑤ スネルは第一次世界大戦後、ハイネンは大編纂事業のような量的無畏よりも理解の深さを求められ、注⑤でのような傾向とは逆に「実証主義からの離反」が起り、古代的生のちよつと内的な事象が熱心な研究されるようになった (Snell, op. cit., 109 ff.)。
- ⑥ 藤澤謙三「*クローツス評価の変遷*」西洋史学、第一〇三号、一九七六年、一〜一五頁。クローツス再評価として『村川聖太郎古代史論集Ⅱ』岩波書店、一九八七年、三〇頁以下、七二頁以下にも言及されている。なおまた当面の問題にはそれほど直接役立つわけではなく、クローツス研究の最近の展開としては Guy Lachenaud, Les études hérodotéennes de l'avant-guerre à nos jours, *Storia della storiografia* 7 (1985), 6-27.
- ⑦ 藤澤氏は今世紀の初期までクローツスを肯定的に評価する根拠が、弁論術と悲劇を規準とする伝統的立場にも、政治史と合理的説明を規

準とする近代的立場にも欠けていた事実を指摘している(前掲論文三頁)。クローツスに対するキケロの否定的評価が伝統的規準になく、近代的規準も重なるところがある。

- ⑧ Felix Jacoby, Herodotus, *RE* Suppl. 2, 1913, 481 ff.
- ⑨ Otto Regenbogen, Herodot und sein Werk, in: *Herodot, Wege der Forschung*, Bd. XXVI, Darmstadt 1965 (urspr. in: *Die Antike* 6, 1930), 58.
- ⑩ Wolf Alty, *Volksmärchen, Sage und Novelle bei Herodot und seinen Zeitgenossen*, Göttingen 1921.
- ⑪ Ernst Howald, *Ionische Geschichtsschreibung, Hermes* 58 (1923), 113-146.
- ⑫ Friedrich Foelke, *Herodot als Historiker*, Stuttgart 1927.
- ⑬ Wolfgang Schadewaldt, *Die Anfänge der Geschichtsschreibung bei den Griechen, Die Antike* 10 (1934), 144-168.
- ⑭ Fritz Hellmann, *Herodots Kreis-Logos*, Berlin 1934.
- ⑮ Karl Wüst, *Politisches Denken bei Herodot*, Würzburg 1935.
- ⑯ Max Pohlenz, *Herodot: der erste Geschichtsschreiber des Abendlands*, Leipzig 1937.
- ⑰ Regenbogen, op. cit., 105 ff.; Schadewaldt, op. cit. (= *Herodot, Wege der Forschung*, Bd. XXVI), 117; Pohlenz, op. cit., 9, 54 ff., 215.
- ⑱ Hellmann, op. cit., 3; Wüst, op. cit., 76.
- ⑲ Jacoby, op. cit., 485.
- ⑳ Gr. KG., Bd. VII, 406 ff. だがそのなかでクローツスの事実的正確さには疑問を覚えている。Vgl. ibid., 411.

これまで『ギリシア文化史』が以後の研究にあたえた個別的影響、それが古代研究の歴史において占める地位、およびそれに対する評価の変遷について、それぞれみてきたが、その結果、このブルクハルトの遺稿がいまや一般にギリシア研究の重要な業績と認められるようになってきていることは確言できると思う。あるいはそれは卓絶した業績とされているとみてよいかもしれない。が、もう一つ、わたしにはラインハルトがW・F・オットーについてのべた言葉が気にかかるのである。「万人が価値を認めても、それでもなお、オットーの業績はいつまでも孤独者のものである。芸術批評で評価をかちえる場合のように、以前は真価を認められなかったものがのちになって一般の賞賛を博した、というものとは違う。学問においてかれが認められたのは、各人自分の必要とするものをかれの業績の全体から切りとった限りにおいてなのである。残りの部分は沈黙のままにおかれている。たしかに次元の違いによる孤独というものがあるのだ。オットーはかれの認識の核心そのものにおいて、もう一つなにか孤独の影をひきずっている。」^①

古代学におけるブルクハルトの地位はここにいわれたオットーに似たようなものか、それとももっと古代学全体の中に根をおろしているのか、少なくともおろしうものなのか。これはぜひともはつきりさせておかねばならない問題である。ヴィラモーヴィツの著作は今日ではブルクハルトほど読まれていまいが、かれの研究成果の上に以後の研究は積まれているという意味で、かれのような人にはこの種の問題はおこりえない。ブルクハルトの古代学に対する関わり方がヴィラモーヴィツと同じでないことは明らかである。しかもブルクハルトが古代学のなかに根をおろしているとすれば、それはオットーのように他の研究者によって業績の一部分が切りとられて利用されるからではなく、その全体が古代学に深く教えるものがあるからでなければならぬ。H・リュエーディガーは、ブルクハルトのえたものは「全体としてのギリシアの生についての史的概観」^②だとのべているが、『ギリシア文化史』の特質が国家、宗教、文化をひとしく包括し、ギリシア

的人間像の変化を時代順に明らかにして、ギリシアの史的全体像を提示した点にあることは疑いあるまい。したがって古代学におけるこの全体像の存在と妥当性と意義とを明らかにすることが問題の要めとなる。

『ギリシア文化史』以後、これに匹敵する全体像は存在するであろうか。ベンクトゾーンは「個々のものの上にある大いなる全体を見失うことなく、古代史の内的統一を保つこと、つまりとりわけドイツの学問が前世代の研究者から貴重な遺産としてうけついでこの理念を保持することは、今日に生きる古代学者の課題であろう。」とのべ、この方向にある研究として、G・D・サンクティスの『起源から五世紀末にいたるギリシア史』（一九三九年）、M・P・ニルツソンの『ギリシア宗教史』（一九四一、一九五〇年）、M・ロストヴツェフの『ヘレニズム世界の社会経済史』（一九四一年）をあげている。たしかにこれらはきわめて数少ない「普遍的意義をもった著作」であり、それぞれ政治、宗教、社会経済の面からする一種の全体像をあたえているであろう。しかしブルクハルトのようにギリシアの生の各方面にわたる史的考察を通して、均衡ある全体像を形成してはいない。このような歴史的生の全体にわたる像は、今日の歴史学における研究傾向と史料状況のもとではまず不可能に近く、今後ともその出現を期待することは難しいであろう。

この点で古典文献学はどうであろうか。ヴィラモーヴィツの達成した学問的成果は巨大であったが、同時にそれによってギリシアに生形成の規範をみる人文主義は圧殺されようとしていた。ラインハルトは当時古典文献学の前におかれた可能性として、学問のために古典的理想を棄てる、古典的理想のために学問を棄てる、両者を融和させようとする、の三つがあったとする。^④このうち最後にあげた道をとったのが、W・イエーガーを中心とする「第三の人文主義」^⑤にはかならない。イエーガーは『バイディア』において、貴族政の時代を通して生成し、プラトンにおいて頂点に達したギリシア的人間形成理想の展開を刻明に跡づけていった。これはみごとに精神史の成果だが、たんにそれにとどまるものではなく、このギリシアの文化概念の究明はそれを受容してみずからの文化と融合させたローマ、ついで近代のヨーロッパ諸民族の形成思想を理解する前提となる。このイエーガーの探求はルネサンス以来学問と規範との両立をもとめた人文主義的古代

研究の最後の試みといえるかもしれない。それがナチスと戦争の渦のなかに巻き込まれ、消えていったあとには、もう古代によって民族や国家の教育を導いてゆこうとする人文主義的運動はおこらなかつた。ラインハルトにおいては古典の意味は絶対者の顕現であり、スネルにおいては「人間に対する尊敬」という漠然たる観念がかれを人文主義に結びつけているにすぎない。イエーガー以後、ともかく全体性を志向している探求としてスネルの『精神の発見』をあげることができるとはできない。しかしこれはギリシア精神の発展を文化の各方面において辿った精神史であり、ブルクハルトのようにギリシアの生の全体を現前させようとしたものではない。

A・ホイスはウィラモヴィツの総合的な古代学が「実は実証的な個別諸科学を並列的に横にならべた以上のものではなかつた」のに対して、ブルクハルトが『ギリシア文化史』で示したものは「全体に向けられている考察であり、はつきりと、個別化した多様な学科を一個の概観にまとめることによって、独自の歴史的考察をなしているもの」とみる。が同時に、かれはこのような探求が今日では現われ難いことを認めている。結局『ギリシア文化史』はギリシアについてわれわれがもちうる最後の史的全体像とみていいように思う。問題はそれが今日の研究者にとってどのような生きた関係をもちうるかである。

ブルクハルトは、われわれの課題は「ギリシア人の考え方と見方の歴史」を示すことであり、文化史は「過去の人間の内面」に向かつてゆく、という。これらの言葉だけをみると、われわれは思想史、精神史を考えがちだが、かれの叙述内容はそれと異なり、古代人の文献に典拠をもつ出来事の記述、伝承・逸話の引用・利用などに充ちている。まことに豊富な歴史的対象の海ともいべきものだが、これはもちろん事実をただ積み上げていくのではなく、また何かを立証しようとしているのではない。かれの「事実」はその項、節、章のテーマについての、あるいはギリシア全体についての、類型的なもの表現している。たとえばシノペのディオゲネスの生き方について逸話を利用した類型的叙述は、このコミュニケーションの哲学者の特性、またギリシアの哲学者の特性、さらにはギリシアの生の特性をよく表わしている。「こうした類型的

叙述を通してうかんでくる恒常的なものは、むしろ古代の遺物よりもいっそう、この上ない真実な古代の「実相」であるだろう。われわれはここに永遠なるギリシア人と親しみ合うようになる。われわれは個々の要因とではなくて、ひとつの全体像^⑧と昵懇になるのである。」

この言葉はブルクハルトがもとめた内面の歴史が何であるかをよく語っている。かれは歴大なテクストに沈潜し、それを何度も読み返し、そこから全体についての何らかの直観を得、その直観で得た像を博搜した事実によって補強、修正しながら、しだいに整った全体像に形成していった。かれの求めたものは古代人の生そのもののなかに生きていたであろうような、古代の全体像である。これは近代的先入見をはじめ、あらゆる先入見を排して、古代に深く没入することによって得られたものであるゆえに、恒常的であり、「永遠なるギリシア人」の像でありうる。

このようなブルクハルトの古代への接し方がいかに近代人一般と異なるか、それを示す一例として、ここにアルキビアデスをとりあげてみよう。F・M・フェルスはアルキビアデス、ペリクレス、デモステネスの名をあげながら、われわれにはいかにこれら古代人の伝記が書きにくいか、いかにかれらが遠い存在になっているかを語っている^⑨。このなかでとくにアルキビアデスは、その公的にも私的にも放埒きわまりない行動によって、われわれに嫌悪感すら呼びおこすであろう。しかしブルクハルトはかれのそういう欠点を知悉しながら、われわれの眼には異様とみえるほど、この男に傾倒している。それは『ギリシア文化史』の叙述にも惨みでているが、晩年のブルクハルトがパウル・ハイゼに贈ったアルキビアデスをうたった詩によく示されている^⑩。フェルスのいう古代人の伝記をブルクハルトならば書けたかもしれない。かれは古代人の存在と行動を能うかぎり古代人に近い眼で追感したからである。

ブルクハルトの志向したギリシア史像がこのようなものであるとすれば、かれが『コンスタンティン大帝の時代』でもとかく用いていた碑文史料を、ここではほとんど無視した理由が理解できるであろう。増大する碑文等の史料の利用は社会経済、政治、法制、祭儀などの構造を知るには有用だが、かれの求める全体像を捉える直観は、それ自身が高度の創

造である文献史料や芸術作品への深い沈潜によってはじめて得られる。この場合は質の高低による史料の選別が重要となる。十九世紀後半以後新発見された碑文等の史料に重要なものは少なくないとしても、ブルクハルトの全体像の形成にはおそらく決定的意味をもたなかったであろう。かれはもともと「生涯役立つ形成と享受の手だて」(傍点引用者)としてこの像を必要と考えたのである。かれはこの意味で、ギリシア研究において人文主義的な人間形成の理念をうけついでいた。形成には事実の無限拡大よりも選別の方が重要である。ブルクハルトは見渡しがたいほど豊かな事実を古代人に做った眼で選り分け、適切に布置しながら、事実から像を彫りだしていったのである。

さて、ギリシアの諸構造を事実に究明しようとしている今日の研究者にとって、ギリシアの生の全体をありしがままに現前させようとするブルクハルトの仕事は、どういう意味をもちうるであろうか。それは十九世紀の歴史的教養が生んだことなく精妙な一成果にとどまるのか、それともわれわれの仕事にとって現に役立ちうるのか。

M・ヴェーバーは古代の社会経済、政治、宗教などの構造の究明に大きく寄与したが、かれの探求は方法的に因果認識と価値分析との二本の柱に支えられている。砕いていえば、歴史の探求は価値分析的解釈によって歴史からとりだされた問題を、因果認識によって関連的に把握してゆくのである。因果認識は徹底的に知的合理的作業であるが、価値分析としての意味解釈は、「たとえば——統一体としてみられた——ギリシア最盛期の〈全文化〉を〈そのもの自体を主題として〉観察し、かつそれを価値と関係づけながら、理解すること」^④である。価値分析的理解には知力とともに、歴史的対象を迫感する能力、対象に内在する精神性を評価する働き、対象の歴史的意義を認識する力などを必要とする。価値分析に偏するまでにそれにすぐれている歴史家の代表として一人、ヴェーバーがあげているのがブルクハルトにほかならない。^⑤

『ギリシア文化史』はもちろんヴェーバーのいう価値分析という概念で包みこめるほど狭いものではない。しかし価値分析という作用に重点をおいてこの書を見ると、これがまさに価値分析の稀にみる傑作であることも疑いない。

いかに厳密な、科学としての歴史学を志向しようとも、価値分析なくては知的因果的研究に自己の出発点も、視点も与え

っている。ブルクハルトは『ルネサンスの文化』によって史家としての名声を得た。たしかにそれは偉大な歴史叙述だが、今日では専門家の間でいくぶん古びている。これにひきかえ『ギリシア文化史』は当初きびしく批判されたが、しだいに批判的研究では見落されているものが比類ない緊密さで捉えられていることが認識されてきている、という。^⑧

とはいえ、おそらく今後も『ギリシア文化史』は多くのギリシア研究者にとって無縁な書物であり続けるであろう。今日の研究者を捉えている専門的分化と分析的探求にとつては、広範で繊細なブルクハルトの考察はいよいよ遠いものともみえるかもしれない。しかし現代でもエーレンベルク、フィンレイ、ペンクトゾーンなどのように、一般に広い視野をもつ歴史学者は研究方法や叙述形式の違いをこえて、ブルクハルトに敬意を表し、かれから何かを学びとろうとしているようにみえる。史料や碑文や事実やその関連だけに全関心を領せられるのではなく、その奥にもう一つ、古代ギリシアにおいて驚嘆すべき偉大な事象を認めうる人には、それにどのように接すべきかを示すブルクハルトの手引きは、研究の固定化した軌道からかれを連れだして、これまでみえなかった視界を開き、探求に新しい視点と示唆とをあたえる不尽の可能性を秘めているように思えるのである。

- ① Reinhardt, Walter F. Otto, in: op. cit., 378 f.
- ② Rüdiger, op. cit., 211.
- ③ Bengtson, op. cit., 20.
- ④ Reinhardt, Die Klassische Philologie und das Klassische, in: op. cit., 348.
- ⑤ Jaeger の *Philologie* R. Meister, F. Zucker, H. Weinstock, L. Helbing などの人心とさせられた風情。
- ⑥ Reinhardt, op. cit., 336, 360.
- ⑦ B. Snell, Die Entdeckung der Menschlichkeit und unsere Stellung zu den Griechen, in: *Humanismus, Wege der Forschung* XVII, 258.
- ⑧ B. Snell, *Die Entdeckung des Geistes*, 3. Aufl. Hamburg 1955. 新井靖一訳『精神の発見』創文社、昭和四九年。
- ⑨ A. Henß, Kulturgeschichte des Altertums, *Archiv für Kulturgeschichte*, Bd. 36 (1954), 78.
- ⑩ Gr. KG., Bd. V, 5.
- ⑪ F. M. Fels, op. cit., 306.
- ⑫ J. Burchardt, *Briefe*, Bd. VIII, 24 f., an Paul Heyse vom 11. März 1882.
- ⑬ Gr. KG., Bd. V, 9.
- ⑭ Max Weber, Kritische Studien auf dem Gebiet der Kulturwissenschaftlichen Logik, in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftlichen Logik*, in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissen-*

- schafische*, 3. Aufl. Tübingen 1968, 248. 森岡弘通訳『歴史は科学を』、ちくま書房、昭和四〇年、一五〇頁。
- ⑳ M. Weber, Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie, in: *Ibid.*, 125 mit Anm. 2.
- ㉑ Kurt von Fritz, *Die Griechische Geschichtsschreibung*, Berlin 1967, Bd. I, 472 ff.

〔付記〕 本稿は、昭和六十一年十一月八日、京都大学の史学史研究会において発表した草稿に加筆したものである。なお、本年停年御退官の越智武臣教授にはいろいろ御好意にあずかった。ここに心から御礼申上げる次第である。

(早稲田大学教育学部教授

Jacob Burckhardt und die Griechische Geschichte

von

Yoshio Nakategawa

Das Werk 'Griechische Kulturgeschichte', Jacob Burckhardts Nachlaß, wurde gleich nach der Veröffentlichung von berühmten Philologen und Historiker, unter anderem Wilamowitz Moellendorff, bitter kritisiert. Danach finden wir jedoch, daß es im Laufe des 20. Jahrhunderts immer höher bewertet worden sei.

Wechsel und Schwankung dieser Bewertung bewegt uns dazu, das Werk rücksichtlich auf die Resultate der modernen Geschichtswissenschaft für die folgenden vier Gesichtspunkte zu untersuchen: 1) Wirkungen der von Burckhardt eingeführten historischen Begriffe, wie z. B. "Agon", "Polis", auf die seitherige Geschichtswissenschaft; 2) Stellung des Werks in der deutschen Alten Geschichte und Klassischen Philologie; 3) Verlauf der Aufnahme durch die Fachwelt sowie Hintergründe der Neubewertung des Werks in den dreißiger Jahren; 4) förderliche Erkenntnisse und Anregungen für die heutige Studien über die Griechische Geschichte.

Funeral Customs of the Common People in Medieval Japan

—Abandonment of Corpses and Aerial Sepulchrae—

by

Itaru Katsuda

In medieval Japan there was a prevailing custom of abandoning corpses in an open field and to animals instead of burying or cremating them. The examination of several cases makes us realize that the way of abandonment can be categorized into two groups according to the types of the funerary objects: 1) those who had no blood relations were